

島根の宝！来待石！

瀧本健太



今回私が取材したのは、来待石^{きまちいし}。徳島県から来た私にとって、来待石というのは初めて聞く名前でした。正直はじめは、「私がこの題材にして大丈夫なんだろうか」と心配でした。しかし、「島根県に來たからには、島根県が誇るものについて知っておきたい」という気持ちもあり、この題材に決めました。今回は、来待石の魅力について、伊藤勉さんと勝部美佐男^{みさお}さんのお二人にお話をうかがいました。

来待ストーンミュージアム

来待石についてあまりに無知であった私は、六月七日、取材前の下見もかねて、松江市宍道町にある「来待ストーンミュージアム」を訪れました。

来待石の彫刻体験もできる工房の駐車場に車を停めて、少し歩きます。まず目に飛び込んできたのは、崖に彫つてある「来待ストーン」の大きな文字。その下には、横幅が三メートルぐらいのトンネルがあります。そのトンネルの中に入ってみると、そこはまるで別世界でした。梅雨時のジメジメした暑さにさらされていた私たちの体を、ひんやりとした空気が包み込みます。

トンネルをくぐると、そこは小さな盆地のようになっています。昔の来待石の石切り場がそのまま残っており、高さ約二メートルの垂直の石壁が、西側一帯にそびえ立っています。その壁を背景にして、右手には「石の舞台」があり、その周辺ではタヌキの石像が石切りをしています。

トンネルの出口から左手には、一階建



ての白いミュージアムがあります。中に入ると、手作業で石切りをやっている映像が上映されており、カキーン、カキーンというかん高いノミの音が響いています。ツチとノミだけで一人で高い場所から石を切り出す姿は、勇壮そのものでした。背後には、来待石を切り出してから石灯ろうに加工するまでの過程が、石工の像や道具などで紹介されていました。

別の部屋には昔の家や庭が再現されていて、来待石でつくられたかまどや手水鉢などが展示されていました。来待石が人びとの生活にとけ込んでいたことがよく分かります。来待石は、昔から日本人に（出雲人に？）愛されていたのです。

来待石灯ろう協同組合理事長・伊藤勉さんへのインタビュー

来待石とのファーストコンタクトをすませた私たちは、七月一二日、宍道町で川賀石材店を経営している伊藤勉さんのお話をうかがいました。場所は、国道九号線沿いにある喫茶店「ミセスマーチン」。この喫茶店は、伊藤さんの奥さん



■ (上段) 取材に答える伊藤勉さん。(下段) 一生懸命にメモを取る取材班。

が経営していらつしやいます。

国道を西へ向かうと、石を加工して作られた巨大なコーヒーカーップが目に入ります。直径一メートルぐらいあります。そこから中へ入ると、来待石で作られた大きな看板があります。喫茶店に足を踏み入れると、前方は一面ガラス窓になっていて、その外には宍道湖の美しい景色が広がっています。店内に入つてすぐの場所には、来待石でつくられたおしゃれなランプや動物のオブジェなど、たくさんのアートストーンたちがいて、私たちを出迎えてくれました。

「また来待ストーンミュージアムに来たみたいだ」と驚いていると、とてもたくましい体格の伊藤さんが優しい笑顔をたたえて現れ、私たちを喫茶店の外にある事務室へと誘ってくれました。

伊藤勉さんは、来待石灯ろう協同組合の理事長として、来待石の振興を中心に

なつて担っています。お忙しい中にもかかわらず、私たちの質問一つひとつ丁寧に答えてくださいました。

伊藤さんは、昭和四十八年までの六年間、サラリーマンとして働いていました。そんな伊藤さんに、来待石を加工する石工という職業に就こうと思つた理由をうかがいました。その答えは単純明快。「ものがづくりが好きだったから」。この思いが強くなって、伊藤さんはおじいさんの代からの家業である石工へと転身したのです。

伊藤さんが石材店で働き始めた昭和四十年代は、来待石灯ろうの最盛期でした。当時は、一か月に約五〇本も売れていたそうです。伊藤さんは、灯ろうをトラックの荷台に積み込んで、自分で新潟などへ運送したそうです。

その当時は、どこの石材店でも一〇人が石工が働いていました。石工たちは、



■ (上段) 自分で考案した照明器具の説明をする伊藤勉さん。(下段) 石のベッドに寝る取材班。

農繁期は農業に従事し、農閑期に石工として灯ろうづくりを行っていました。石灯ろうは形と大きさが決まっているので、笠や火袋や竿などの部品を分業制でつくつていきました。何かに追いかけるように懸命につくり続けても、灯ろうはほとんど売れていったそうです。

石工として働き始めた当時、大変だったことを聞きました。初めは先輩ばかりで、人間関係がなにより大変だったそうです。石を削る際に粉塵などが大量に出るので、それも大変だったとおっしゃっていました。しかし、ものづくりが好きだった伊藤さんにとって、当時は灯ろうづくりに追われて大変だったけれど、それよりも「好きなものがつくれる」という喜びのほうが大きかったと、笑顔で答えてくれました。

現在では、住宅の洋風化や中国産の安価な御影石の輸入などが原因で、多くて

も一か月に一〇本売ればよいほうです。また、石工職人や石材店の減少も進んでおり、五年前には一六軒あったお店が現在では一〇軒にまで減っています。そのうちの五軒は跡継ぎがおらず、いまの代で終わりになるかもしれないという厳しい状況だそうです。

伊藤さんは、このままでは来待石の産地自体がなくなってしまうかもしれないと、寂しそうにおっしゃっていました。

来待石の魅力

しかし、こんな厳しい状況にたたきだされていながらも、伊藤さんは「今が一番面白い」と言います。「昔は灯ろうづくりに追われていたから、なかなか自分がつくりたいものがつくれなかったが、今は自分で工夫して来待石を生かせる。不景気な今だからこそやってみようと思う」と、力強く語ってくれました。



■ (右上) 大迫力の石切場。(右下) 石切り用のチェーンソー。(左) 石切場の入り口。中は巨大な洞窟。

ブリュエなどを見ると、やわらかく加工しやすいことは一目瞭然です。苔などがつきやすいという点ははどうでしょうか。

最近、来待石にゼオライトが多く含まれていることが明らかになりました。ゼオライトは、放射能を吸着する働きがあることで注目を集めている鉱物ですが、放射能だけでなく窒素やリンなどもよく吸着するそうです。もしかしたら、このような性質が、苔や藻が付きやすいという来待石の特徴を生み出しているのかもしれない。

伊藤さんは、来待石のこのような性質を生かして、宍道湖・中海の水質浄化や護岸工事にも役立てることができると、目を輝かせて語っていました。

伊藤さんに、来待石の魅力聞いてみました。即座に伊藤さんは、①やわらかく加工しやすいこと、②苔などがつきやすくくまなく自然に溶け込むこと、と答えられました。石灯ろうや動物のオ

チするようにと考えてあります。

また宍道湖岸には、夕日を見ることのできるようにと、来待石でつくられたベッドが置いてありました。私もそのベッドに寝させてもらいました。きつと固くて痛いんだろうなと思いつつながら恐る恐る寝てみましたが、寝てみてびっくり！なんと、石なのに柔らかく感じて、とても寝心地がいいのです。そのままずっと寝ていたい気分でした。来待石でベンチやテーブルなどの家具をつくることも、伊藤さんの工夫のひとつです。

また最近では、タイルや敷石などの建材として来待石を利用しようという動きがあるそうです。伊藤さんは、試作品のタイルを手に、建築分野の人たちにも来待石の魅力を伝えていきたいとおっしゃっていました。

来待石の石切場訪問

私たちは、伊藤さんに案内していただき、来待石の石切場を訪れました。石切場は、来待地区と玉湯地区との境界付近にあります。編集長が山陰自動車道から見つけて、訪問することを熱望していた場所です。

道路に車を停めて、少し山の中に入る



■ (右) 石切場は巨大な洞窟。左端が勝部さん。(左上) チェーンソーで切った石の隙間に楔を打ち込む。(左下) 石を切り出した後の穴。

と、高さ三〇メートルぐらいの石の壁が目に見え、飛び込んでいきます。壁面には、一メートルの幅で横に筋がはいっており、石を切り出すことでこの壁ができたことを物語っています。

その下部には、高さ約六メートル、幅も約六メートルの四角い横穴が空いています。人の気配がしませんでしたが、伊藤さんが呼びかけると、穴の中から勝部美雄男さんが出てきました。なんと一人



■この石切場跡はとにかく高かった。あんな高いところで作業していたとは……。

ているのです。

勝部さんは、石切場の近くにある玉湯町柳井という集落に住んでいます。この来待石を切り出している山は、周辺の二つの集落が所有しているそうです。

この巨大な石切場から、どうやって勝部さん一人で石を切り出すのでしょうか。横穴の中には、巨大なチェーンソーがついた採石機が、レールの上に乗っていました。このチェーンソーを使って、まず深さ一メートル、長さ二メートル、幅約五〇センチの大きさに石を切り、割

れ目に一〇センチほどの楔を打ちつけます。そうすると、底面がきれいに剥がれて直方体の石が取れます。

切り出した直後の来待石は、全体的に青っぽい灰色をしていて、中央部は深い紺色に見えます。石

はその後、空気に触れることによって、来待石らしい黄褐色に変わるのでそうです。

このようにして切り出した来待石のブロックは、約二トンもの重さがあります。長年石切場で働いてきた勝部さんの腕は、決して太くはありませんが筋肉質のたくましい腕でした。

伊藤さんの作業場・川賀石材店

最後に私たちは、伊藤さんの作業場である川賀石材店におじゃましました。場

所は、来待ストーンミュージアムのすぐ近くです。

敷地に入ると、まず、いろいろな形の石灯ろうや石灯ろうの部品が目に入ります。石灯ろうの展示場になっています。その中に苔むした灯ろうの筈が置いてあり、その上に小さなアマガエルが乗っていました。さすが、自然に溶けこむ来待石の灯ろうです。

奥の大きな建物の中には、石を加工するための様々な機械が、それぞれの場所に備え付けてあります。石を切り分ける直径一メートルの円盤状のカッター、石用のろくろ、円柱状に石をくり抜く機械、石に穴を開ける機械など、初めて目にする機械ばかりです。

敷地の入り口付近の新しい建物には、御影石を加工する機械が備え付けてありました。御影石の墓石に文字を彫るための機械ですが、伊藤さんはこれを使って、来待石に文字や模様を彫り込んでいます。

この建物の入り口付近には、陶芸用の電気炉が置いてあります。この炉の中で来待石を焼くと、なんと石は黄褐色から赤褐色に変化するのです。しかし温度が高すぎると、中で溶けて変形してしまいます。伊藤さんは、焼くときの温度をいろいろと変えて、これまでにない新しい作品を生み出そうとしているのです。

来待石の粉は、これまでも石州瓦の釉薬として用いられてきました。石州瓦独特の赤は、来待石によってもたらされる

のです。最近では、松江在住の陶芸家とのコラボによって、来待石の粉を釉薬として用いた陶器も試作・販売しているそうです。

様々な魅力を持ち、人びとに愛されてきた来待石。この石は、やわらかくて加工しやすいので、石段はもとより、石臼やかまど、灯ろうや狛犬などの材料として用いられてきました。やわらかさは、風化しやすさにもろさにもつながるのですが、日本人はそこにも魅力を見いだしてきました。散る桜を愛でる感性と通底するものです。

今回の取材を通して、来待石の魅力をたくさん知ることができました。と同時に、島根の宝ともいべき来待石を、ぜひ次世代に残していきたいと強く思いました。そのためには、松江市を来待石で埋め尽くす。そして、松江に来待石の町として情報発信

する。そうあってほしい、いやそうでないといけないと、心から願うようになりました。この記事が、その一助になれば幸いです。

(たきもと・けんた／文化資源学系一年生)



■(上段) 巨大なカッター。(中段) 石を円形に削る機械。(下段) 石を円筒形に削る機械。



探検!

倉吉のトイレ

柿田有香



■ (上段) さわやかトイレ。(下段) 博物館前お手洗い。

倉吉市は一九八五年、「トイレからのまちづくり」をスタートさせ、公衆トイレの整備に力を入れてきたそうです。実際、どんなトイレなのか見てみたいと思います。倉吉市に足を運ぶことにしました。工夫をこらしたトイレ、珍しいトイレ、いろいろあるようです。どんなトイレが私たちを待っているのか、どきどきしながら出発しました。

七月一六日、午前九時にジャンボタクシーに乗って短大を出発した取材班四人は十時三十分頃倉吉市に到着、さっそくトイレ巡りを開始しました。

① さわやかトイレ

まず最初に、白壁土蔵群や打吹公園といった倉吉観光名所のほぼ中央にある「さわやかトイレ」に行きました。さすがに観光エリアの中心に作られたトイレとあって、今回訪れたトイレの中で一番の存在感を持っていました。このトイレは昭和六十三年全国グッドトイレ10賞の最優秀賞に選ばれています。外観は街

並みにあわせた和風デザインで、空間全体に統一感がありました。

電話コーナーや休憩コーナーが設けられていました。女性トイレ内には小児用便器もあり、小さい子供でも使用しやすくしてあります。驚いたことにトイレ内に更衣コーナーがあり、全身鏡も設置されていました。

また、トイレの隣には人工池があり、鯉が泳いでいます。このように、さわやかトイレは、使用しなくても、見るだけでもさわやかな気持ちになるトイレで、これ自体がひとつの観光スポットになっています。

② 打吹公園の博物館前お手洗い

次に打吹公園にある博物館前トイレに行きました。ちなみに打吹公園は、日本さくら名所一〇〇選、日本の都市公園一〇〇選、森林浴の森一〇〇選等には選ばれた山陰を代表する公園です。建物は数寄屋風になっていて、外観は背後の森にうまく溶け込み、とても雰囲気が出てい



■ (上段) さわやかトイレの小児用便器。(下段) 博物館前お手洗いの全身鏡。



■打吹公園の中央お手洗い。

トイレの前にお手洗い案内図があり、しかも点字付きです。車椅子用、オストメイト用、乳幼児用の設備が整っていました。オストメイト用トイレは初めて聞きましたが、消化管や尿管

④ JR倉吉駅のトイレ

トイレの前にお手洗い案内図があり、しかも点字付きです。車椅子用、オストメイト用、乳幼児用の設備が整っていました。オストメイト用トイレは初めて聞きましたが、消化管や尿管

このあと、⑥上井第一児童公園のトイレにも立ち寄りしました。外壁にはかわいらしい絵が描かれていて児童公園らしいトイレでしたが、残念ながら少々老朽化していました。

このお手洗いは、外観が土蔵風になっており、壁が上は白壁、下はなまこ壁風のデザインになっています。また、車椅子対応トイレが男女別で設備されていたり、スロープや手すりが付いたり、バリアフリーが至る所で配慮されたトイレです。近くにベンチもあり、ちよつと休憩するにはびつたりな場です。トイレの手洗い場が低くしてあるなど、小さな配慮もあると思いました。



■河北中央公園のお手洗い。

このトイレは外観も不思議でしたが、「コンフォートステーション」という名

ました。
 ここでも女性トイレ内では子供用トイレと全身鏡がありました。また、トイレ内に天窓があったのが驚きでした。
 たまたま観光に来ていた大阪の若い男性二人組と出会い、倉吉のトイレについてあれこれ話しました。これも何かの縁だと、一緒に写真を撮りました。

③ 打吹公園の中央お手洗い

中央お手洗いは建物全体が白壁土蔵風のデザインとなっていて、外にはつくばい（手水鉢）も設置してありました。トイレ正面の軒下には絵馬が吊り下げてあり、とても印象的でした。男性トイレ内と女性トイレ内の便器の色が違うという発見もありました。あとで写真で確認し

たのですが、男子トイレの便器の色は赤茶色で少し派手だと思いました。
 中央お手洗いは、昭和六十二年度全国グッドトイレ10賞に入選しており、入り口付近にはこれを記念して立派な石碑が建てられていました。また、近くに小さな動物園があつて、サルなどがいるのでトイレと一緒に楽しむことが出来ます。
 打吹公園にはこの他にもいくつかトイレがあるので、時間がなかったので行けませんでした。



■（上段）JR倉吉駅のトイレ。（下段）倉吉バスプラザのお手洗い。

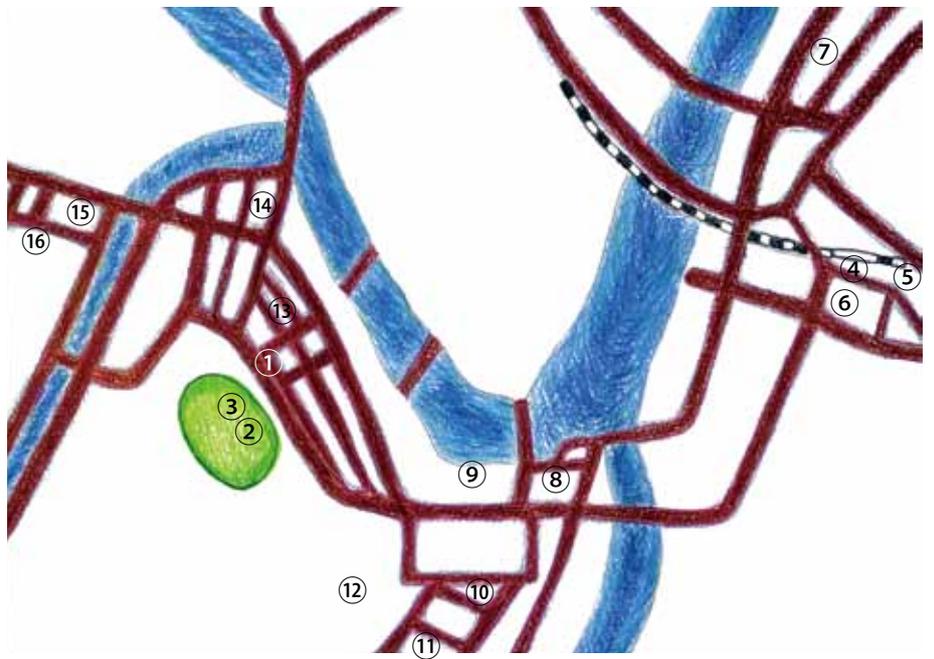
に不自由がある人の対応トイレです。倉吉駅のトイレは特にきれいで、掃除をこまめにしている印象でした。

⑤ 倉吉バスプラザのお手洗い

⑦河北中央公園のお手洗い
 このお手洗いは探すのにとっても苦労しました。男性用、女性用の表示は壁を彫ったような形になっていて、すごく斬新なデザインだと思いました。付帯施設としてベンチを配し、休憩コーナーが設けてありました。女性トイレにはベビーカー・幼児用コーナーも設けてありました。また、十分な広さ・機能を持った優先トイレもありました。

⑧ 上灘コンフォートステーション

このトイレも探すのが大変でした。何しろ外観がちつともトイレらしくないのです。建物は白い木造洋風二階建てです。二階は一体どうなっているのか、とても気になります。外には大きなイチヨウの木がありました。



前も不思議でした。あとで英語の辞書で調べると、コンフォート (comfort) というのは「慰め、安心感、快適さ」などという意味で、comfort stationで「公衆便所」とあります。どうしてみんなが知らないような英語にしたのか、とても不思議でした。

⑨ 打吹公園だんごのお手洗い

「打吹公園だんご」は倉吉でもっとも有名なお菓子で、倉吉のお土産といえば

このお団子です。抹茶色、茶色、白の三色団子です。もう十五年ほど前になりましたが、この三色団子づくりのトイレがつくられ、話題になったそうです。「打吹公園だんご」を製造する石谷精華堂の本店敷地内に建てられたもので、公衆トイレではありません。

この巨大なだんご型トイレはあまり評判がよくなかったそうで、現在は倉庫となっていて。窓がなく、怖かったことが理由なのでしょう。私は三色団子のトイレの方がユニークでよいと思うのですが……。隣に新しいトイレがつくられていますが、こちらもやはり「打吹公園だんご」をモチーフにしています。印象的だったのは手洗い場まで三色になっただけです。こんなにユニークなトイレは初めて見ました。外には水車



■ (上段) 上灘コンフォートステーション。(中段) 打吹公園だんごのお手洗い。(下段) 石谷精華堂の新しいトイレ。手洗い場が三色です。

もあり昔の雰囲気漂う外観となりました。

衝撃的なだんご型トイレに出会ったところで午前の部は終わり。昼食は倉吉名物の土蔵そばを食べました。とても造りの面白い店で、そばも美味しかったです。その後、**⑩ 昭和町第三児童公園のトイレ**に行きましたが、前の児童公園同様、古

くなっていたので少しきれいにした方がよいと思いました。

⑪ 上灘中央公園のお手洗い

このトイレはなぜか男女表示がたくさんありました。また、トイレの入り口が開放的で中がまる見えでした。

トイレの隣には自動販売機が三台も設置された休憩所があります。正面の壁に



■ 上灘中央公園のお手洗い。(上段) 外観。(下段) なぜか男女表示がたくさん。

「大御堂廃寺といれ」と大きな字で書いてあったので、どうやらここは廃寺跡のようです。

⑫「倉吉パークスクエア」屋外トイレ

まず注目したのは、コンクリート造りの本体の外周を格子ですっぽり包んでいったことです。機能面では、高齢者や障害者を持つ人、子供連れの人などに配慮し、優先トイレもありました。点字ブロックも設置されていました。

パークスクエアには鳥取二十世紀梨記念館もあります。私たちはここでひと休み、梨アイスを食べました。

⑬うつぶぎトイレ

倉吉信用金庫うつぶぎ支店は外にトイレが設置されていて誰でも自由に使える



■（上段）「倉吉パークスクエア」屋外トイレ。（下段）福祉会館前お手洗い。



■うつぶぎトイレ。

す。壁に石が張り付けてあって岩のような外観になっていました。その石が和の雰囲気を醸し出していて、ゴツゴツした石が町によく合っているなあと感じました。コンパクトなトイレで、驚いたことに男女兼用となっていました。男女兼用はちょっと利用しにくいですがね。

⑭福祉会館前のお手洗い

愛称は「シンフォニートイレ」です。トイレを上から見るとグラウンドピアノ型になっており、とてもユニークなデザインです。現在、福祉会館はなくなっているのですが、このトイレを探したのは大変でした。今でも、「福祉会館前お手洗い」と

いう大きな文字はそのままです。また、バス停留所前にあるため、ベンチ、自転車置き場、公衆電話なども備えられていますが、いずれも屋根の下にあります。とても便利な場となりました。

⑮西倉吉コンフォートステーション

こちらは上灘コンフォートステーションと違ってトイレらしいトイレで、一目で公衆トイレとわかります。入り口の下にベンチがあり、公衆電話もありました。優先トイレや小児用トイレ、ベビーベッドもあり配慮が多数なされています。上灘コンフォートステーションと西倉吉コンフォートステーションは同じコンフォートステーションなのにあまり共通点は感じませんでした。

⑯西倉吉駅跡地のお手洗い

車椅子専用のトイレもあり障害のある人でも利用できるトイレとなっています

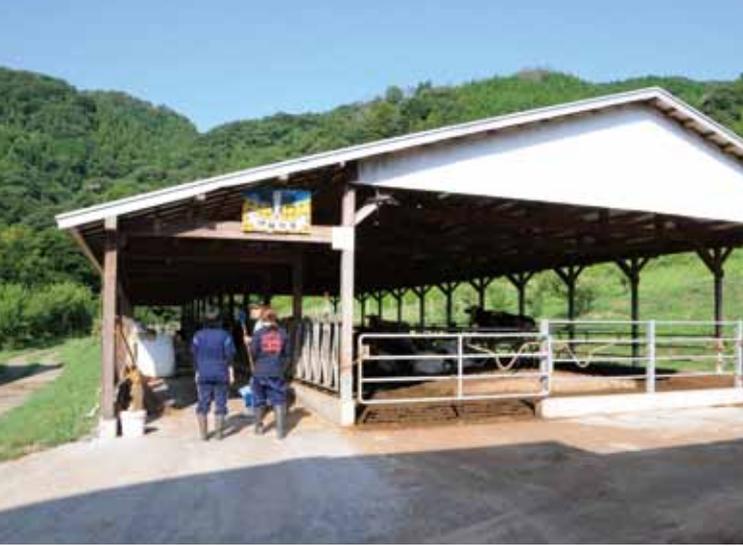


■（上段）西倉吉コンフォートステーション。（下段）西倉吉駅跡地。

た。余談ですがトイレ内にツバメの巣がありました。また、花が飾られていてきれいでした。西倉吉駅の跡地ということで、近くに少しですが線路が残されています。

これで倉吉市のトイレの旅は終わり。全部で十六のトイレを回りました。時刻は午後三時三十分過ぎ。途中、昼休憩を皆さんで五時間もひたすらトイレを巡ったというわけです。

今までトイレに注目したことなどなかったのですが、倉吉市のトイレはどれも興味をそそられました。公衆トイレにこだわる倉吉市の思いやりや温かさなども感じることができました。少し古くなったトイレもありましたが、倉吉のみなさん、これからも素敵なトイレで素敵な町づくりを進めてください。読者のみなさんも倉吉市を訪れたときはぜひトイレに注目して下さいね！（かきた・ゆか／文化資源学系一年生）



一日牧場体験

伊藤牧場

(出雲市佐田町)

藤本 茉穂

た。生まれて一週間の子牛は牛乳を、それ以降は脱脂粉乳を飲み、配合飼料も少しずつ食べられるようになります。

子牛たちは、ミルクの入った容器を顔の前に持つていくと自分から飲み始めます。初めのうちは、まん丸の瞳で見つめてくる姿に「かわいい！」と思いつつ飲ませていたのですが、子牛と侮ることなかれ、結構な力でグイグイ引っ張られて、危うく容器を落とすところでした。うまく飲めないときは、一度容器を離して形を整えるといいそうです。

子牛の牛舎には昨日生まれたばかりの子牛や生後三〜五カ月の少し大きな牛まで飼育されています。双子の子牛もいました。少し大きくなった牛は一列に並んでいて、餌を準備する音が聞こえると一斉にこちらに首を向けます。餌は牛舎の入り口に近い牛から与えるのですが、待

今回、私が一日牧場体験をさせていただくことになったのは、出雲市佐田町の伊藤牧場です。学校が休みの日は三食のお供に牛乳を飲んでいるほど、筋金入りの牛乳好きの私は、是非とも牧場での仕事を体験したいと思い、取材させていただきました。

編集会議のとき宿泊先を探していた私に、「伊藤牧場近いから家泊まる？」と言ってくれた長島さんと一緒に、体験スタートです。

自然豊かな牧場で

透き通った水が流れる川、木々が生い茂る山や森林といった、大自然に囲まれた場所に伊藤牧場があります。伊藤牧場は、昭和三十三年に経営を開始しました。最初は六頭だった搾乳牛も、今では百頭以上いるそうです。牧場は場長の伊藤篤

男さん、息子の伊藤学さんをはじめ、六人の方が働いておられます。

牧場の搾乳牛舎では、牛は一頭も繋がれておらず、水を飲む牛や牧草を食べている牛、横になってくつろいでいる牛など様々で、のびのびと暮らしています。

八月十六日、朝六時からお邪魔させていただきました。伊藤学さんに初めに案内していただいたのは搾乳牛舎です。牧場にいる牛は、ホルスタインと呼ばれる種類の黒と白の毛並みの牛です。どこからともなく聞こえてくる牛の鳴き声に、気合が入ります。

最初の仕事

伊藤さんに一日の仕事の流れを説明していただき、最初の仕事へ。搾乳牛の牛舎から少し山を登ったところにある子牛たちの牛舎で、子牛にミルクをあげまし



■授精から搾乳期間まで徹底された管理。



■(上段) 沢山食べてすくすく成長した子牛たち。(下段) 生まれて間もない子牛はミルクをあげるのも一苦労……。

ちぎれないのか、隣の牛の餌をこっそり食べている姿もしばしば見られました。

餌やりが終わると、糞尿を掃除して粗殻を撒いていきます。牛たちがいるすぐ後ろには溝があり、機械を自動させると、溝に落とした糞尿が自動的に運ばれていきます。これには思わず「おお〜！」と声を出して感動しました。

午前八時三十分、子牛牛舎での仕事を終え、山を下りて搾乳牛舎の奥にある未經産の牛たちがいる牛舎へ。ここでは生後十二カ月を超えた牛たちに、初めてのお産のための人工授精と受精卵の移植が行われます。繁殖力を高めるために大阪から繁殖専門の獣医さんも来られます。子牛牛舎にいた牛たちの餌と比べると、格段に食べる量が増えます。配合飼料が入った容器を一度牛の前に持ってい

き、柵から顔を出したら食べやすい位置に飼料を広げます。中には人見知りの牛もいますが、人が離れると食べるそうなので実際に離れてみると、こちらをチラツと見た後に食べてくれました。

出産に立ち会う

午前九時、餌やりを終えると、出産が始まるとのことです。急いで搾乳牛舎の中へ。母牛は今回が二回目の出産で割と早く生まれるとのことでしたが、私にとつては何もかもが初めて見る光景ばかりで「え、ど、どうすればいいの!？」と一人勝手に動揺していました……。

三十分後、母牛の頑張りで徐々に前足が出てきました。子牛の頭が見えてきたところで、子牛の足に縄を結んで引張り出します。しばらくすると、無事に子

牛が誕生!! パッチリとした腫の男の子でした。出産の七、八割は夜にあるようで、今回は本当に貴重な体験をさせていただきました。

その後、休憩をしてから再び子牛の牛舎へ行き、牛舎に撒く粗殻を袋に詰める単純な作業ですが、軽い粗殻も袋いっぱい詰めると結構な重さになり、なかなかの重労働でした。

生命を身近に感じる

休憩時間に場長の伊藤篤男さんにお話を聞くことができました。伊藤牧場のコンセプトは「食の製造をするからにはきれいに!」。牧場の隣に住んでいる人、つまり消費者がすぐ近くにいるという自覚を持つことが大切だとおっしゃっていました。実際に牛舎を訪れて真っ直ぐ続く通路を見たときに、きれいな所だと思つと同時に、細かいところまで気配りをされていることを感じました。

また、伊藤牧場では牧場体験を実施しています。小学生や子どもも会、老人会など年間七十〜八十回、約千六百人が子牛との触れ合いを楽しんだり、牧場を見学しに来るそうです。現場を見てもらい、生き物と触れ合う

ことで生命の大切さを知る機会になればとのことでした。

私も、小学生のときに乳搾りを体験したことがあります。その時の牛の毛並みの肌触りや温かさを、今でも覚えています。幼い頃から生き物と触れ合うこと





で、感情を豊かに育んでいくことができます。このような機会を設けている伊藤牧場の取り組みは、とても素晴らしいと思いました。

午後の仕事

午後一時三十分から仕事再開。搾乳牛舎の糞尿掃除と牛たちのベッドとなる堆肥を均します。牛たちがゆつくり休める

ように丁寧に堆肥を均していくのですが、見た目から想像するより重い堆肥を均す作業は、夏の暑い時期にはなかなか大変です。しかし、これもおいしい牛乳を出してくれる牛さんのため。隅々まで整え、汗だくになりながら、ひたすら腕を動かしていました。

その後、伊藤さんが運転するトラクに乗って、山の上にある有限会社エコプラント佐田に堆肥を受け取りに行きました。ここでは堆肥と牛糞を混ぜた肥料を

農家に提供しています。コンテナから堆肥がこぼれないようにシートを被せて牧場に戻り、午後三時三十分、トラクターで山形に積み上げていきました。ときどき堆肥に乗り上げてトラクターが傾ぎ、倒れそうになりましたが、運転する長島さんの絶妙なハンドル捌きで難を逃れました。

午後四時三十分、堆肥を積み上げる作



業を終えてから、子牛に三回目のミルクをあげました。三回目となるとミルクも手早く作れるようになり、順調にあげられる……と思いきや、生まれたばかりの子牛はまだミルクの飲み方がわからないので、頭を支えないとうまく飲めません。子牛が柵に頭をぶつけ、私も柵に足と腕をぶつけながら、なんとか全部飲み切ってくれました。

息つく暇もない搾乳

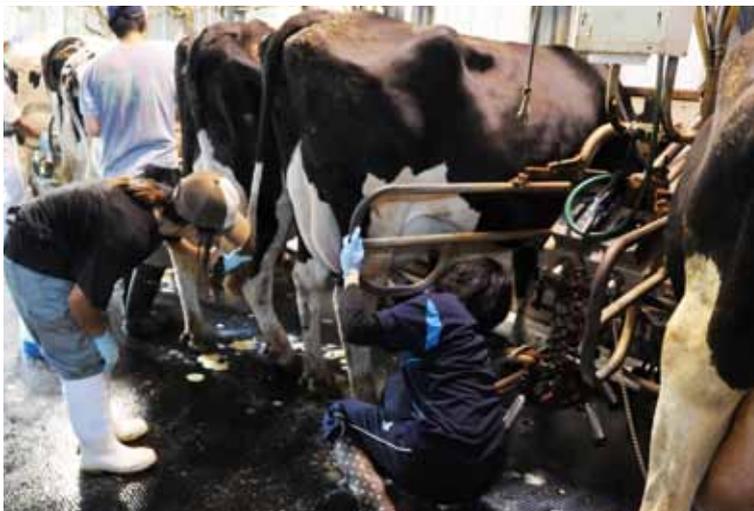
休憩をはさんで午後五時五十分、ついに夕方の搾乳が始まりました。搾れる牛乳の量は一回の搾乳で約十五キロ。朝夕の二回搾乳を行うので、一日一頭当たり三十キロほど搾乳するそうです。

搾乳場をパーラーで仕切ることにより、同時に八頭ずつ搾ることが出来ます。牛がパーラーに入ったら、まず頭上にあるボタンを押して牛の頭を固定、それから乳頭を消毒液で殺菌し、五回ほど手で搾ってみて異常がないかを確認します。

消毒液を拭き取り、ミルクカー（搾乳機）を取り付けると、搾乳が自動で始まりま

す。搾られた牛乳はパイプを通って、隣の部屋にある専用のタンクに運ばれていきます。搾乳が終了し自動でミルクカーが外れてから、もう一度乳頭を消毒してゲートを開けると、牛たちが自分でゲートを出て牛舎へ戻っていきます。以前は一頭一頭を繋いで搾乳をしていましたが、牛が自分から動けるほうがストレスが少ないので、このシステムを導入したそうです。

搾乳の一連の作業を体験させていたただいたのですが、一頭終わればすぐに次の牛の搾乳に取りかかるため、一息つく時間がなく、とにかく動き回ります。急いでいても疎かにならないように、ミルクカーを取り付けるのが難しかったです。無駄な空気が入らないようにするのは勿論のこと、大人しい性格の牛はすんなり取り付けることができましたが、少々活



■(上段左)三人がかりで出産のお手伝い。(上段右)無事に子牛が誕生！(下段左)搾乳場の隣のスペースでは、牛たちが順番を待っています。(下段右)搾乳はスピードと正確さが命。

発な牛に取り付けようとすると、尻尾で顔を叩かれそうになったり、もたもたしていた私が悪いのですが、足踏みをさせたりとドキドキしっぱなしの時間でした。

搾乳中の触れ合いを通して、いろいろな性格の牛がいることがわかります。静かに順番を待っている牛、歩き回っている牛、搾乳中の牛にちよっかいをかける牛、頭を撫でられるのが好きな牛も、好奇心旺盛な牛もいました。

最後の頭の搾乳が終わり、午後七時二十分、一日牧場体験が終了しました。

一日体験を終えて

今回牧場で仕事をするまで、私は乳牛を育てることについてあまり詳しく知りませんでした。ただ搾乳をして牛舎の清掃をし、餌を与えるだけではありません。栄養が偏らないように飼料を配合したり、快適な睡眠がとれるように堆肥を均したりと、数多くの作業が存在します。ストレスを軽減し、個性豊かな牛たち一頭一頭がのびのびと暮らせる環境を作り上げるには、体力と知識、そして牛を大切に育てていく気持ちが必要不可欠です。一日牧場で仕事をしていくなかで、命を育てていく難しき、続けることの大変さ、そして生き物と触れ合う楽しさを感じることができました。

仕事内容はやはりほとんどが力仕事で、午前の仕事が終わったときには暑さのせいもあってか少し疲れていました。

しかし、牛と触れ合いながら仕事をしていくうちに「頑張らなきゃ!!」と思い始め、自分が出来ることからやってみようという決意すると、あっという間に時間が過ぎていきました。翌日の全身筋肉痛を予感しながらも、なかなか体験できないことを終えた達成感がありました。牛乳の一滴一滴に、沢山の人が関わり、愛情がこもっています。今回経験したことを忘れずに、これからも牛乳を飲んでいこうと思います。

最後になりましたが、貴重な体験の機会をつくってくださった伊藤牧場の皆様、そして快く宿泊を承諾してくださった長島家の皆様、本当にありがとうございました。(ふじもと・まほ／文化資源学系一年生)

